

ボラギ溪谷遺跡の石器

大沼克彦

平成17年の8月1日から11日まで、イラン・イスラム共和国ファルス県のシヴァンド川流域にあるボラギ溪谷遺跡の調査に参加した。この調査を通して、2つの地点（地点75（BV75）、地点130（BV130））（写真1、2）で多数の石器が出土した。

地点75と地点130から出土した石器は破損品1,665点を含む5,272点で、石器の素材となった岩石は、濃茶色から緑色をしたチャート質フリントである。最大出土石器「初期段階石核」は長さ47ミリメートル、幅24ミリメートル、厚さ24ミリメートルと極めて小形で、ボラギ溪谷遺跡での石器製作が小形の石材を用いておこなわれたことを示している。

完形石器は3,607点あり、内訳は、デビタージュ、石核修正剥片、チップあるいは二次加工由来剥片（二次加工剥片）、二次加工を施された石器（二次加工石器）、石核である。

デビタージュ、即ち、石核剥離の産物としての意図的剥片は、原皮付き剥片（原皮剥片）、部分的原皮付き剥片（部分的原皮剥片）、原皮なし剥片（剥片）から成る。原皮なし剥片は更に剥片、石刃、細石刃に分けられる。

二次加工石器には、背潰し石器、挟入石器、尖頭石刃/細石刃、サイド・スクレイパー、エンド・スクレイパー、急角度スクレイパー、親指爪状スクレイパー、彫器がある。これらは概して極めて小さく、非幾何学形細石器と呼べるものも多く存在する。非幾何学形細石器とは別に、三日月形や台形をした幾何学形細石器も少なからず存在する。

石刃を分割して幾何学形細石器を製作する際に生じるマイクロ・ビュランは1例もなく、幾何学形細石器は細石刃よりも小形である。従って、ボラギ溪谷遺跡の幾何学形細石器はマイクロ・ビュラン技法によってではなく、細石刃に二次加工を施すことで作られたと考えることができる。

マイクロ・ビュランの欠如に関しては、ボラギ溪谷ではこの技法がすでに採用されなくなっていた、あるいは、もともと存在しなかった、という二つの可能性が考えられる。

剥片と石刃は打撃で剥がされていて、それらの石核は多くは角柱形である。新石器時代にしばしばみられる押圧石刃は皆無である。

細石刃は幅2ミリメートルから5ミリメートルの大きさで、しばしば、細かい精巧な二次加工痕を有している。おそらくは、何らかの使用の痕跡であるだろう。

細石刃は押圧で剥がされていて、極めて規則的な剥離である。同様に、細石刃石核は規則的な剥離痕を残していて、円錐形、角錐形、角柱形を呈している。しかし、「砲弾形」の細石刃石核はみられない。穀物を刈り取る際に付着する「艶」を帯びた石器は皆無である。

全体としてみれば、ボラギ溪谷遺跡の石器群は上述した小形石器と幾何学形細石器で特徴づけられる。この点で、西イラン地方のワルワシ岩陰遺跡（Olszewski 1993）に代表されるザグロス山麓地方の続旧石器・ザルジアン石器群の特徴を有している。

ただ、ワルワシ岩陰遺跡の石器群と異なり、細石刃の剥離に際して押圧が用いられている。この点がボラギ溪谷遺跡石器群とザルジアン石器群の大きな違いである。

最近になり、ボラギ溪谷遺跡石器群に類似する資料がイラン西部のルリスタン地方ザグロス山麓のヴァーレ・ザルド岩陰複合遺跡から報告されている。そこでは、続旧石器的

器と「プロト・ネオリシック」的石器が崖線に沿って200メートルほどにわたって分布している(Roustaei, et al. 2004)。石器の内訳は鋸歯縁石刃・細石刃、エンド・スクレイパー、錐などであり、また、精巧に剥離された石刃と細石刃を有している。ヴァーレ・ザルド岩陰複合遺跡でも石刃は押圧で剥離されておらず、細石刃だけが押圧で剥がされている。細石刃石核のなかには「砲弾形」と呼べる極めて精巧なものがある。

ボラギ溪谷遺跡石器群を、さしあたり、ザルジアン石器群の終焉から、押圧剥離を有していた「プロト・ネオリシック(Mellaart 1965: 18)」に至るまでの、ある時期に年代づけることができそうである。

具体的には、研究がかなり進んでいる北イラク・ザグロス山麓のザヴィ・チェミ・シャニダール(Solecki 1981)、ケルメツ・デーレ(Watkins et al. 1991)、ネムリク9(Kozłowski and Kempisty 1990)、ムレファート(Howe 1983)、カリム・シャヒル(Howe 1983)遺跡などの「プロト・ネオリシック」石器群に関係づけることができるだろう。

特に、幾何学形細石器と押圧細石刃の存在から、ケルメツ・デーレ遺跡段階5、4、および、ネムリク9遺跡下層に関連づけることができる。さらに、細石刃の押圧剥離がザグロス山麓のなかでも東方のイラン方面で早く出現したという可能性を考慮するなら、完成された細石刃押圧剥離を有していたムレファート遺跡、カリム・シャヒル遺跡とあまり離れずに先行した石器群と考えることができる(表1)。

参考文献

- Howe, B. 1983 Karim Shahir, *Prehistoric Archeology along the Zagros Flanks*, edited by L. S. Braidwood, R. J. Braidwood, B. Howe, C. A. Reed and P. J. Watson, Vol. 105 of the University of Chicago Oriental Institute Publications, Chicago, pp. 23-154.
- Kozłowski, S. K. and A. Kempisty 1990 Architecture of the Pre-pottery Neolithic Settlement in Nemrik, Iraq, *World Archaeology* 21-3, pp. 348-362.
- Mellaart, J. 1965 *Earliest Civilizations of the Near East*, Thames and Hudson, London.
- Ohnuma, K. 1997 Chronology of the "Proto-Neolithic" of Iraq and Syria: A Hypothetical View, *Al-Rafidan* Vol. XVIII, pp. 45-58.
- Olszewski, D. I. 1993 The Zarzian Occupation at Warwasi Rockshelter, Iran, *The Paleolithic Prehistory of the Zagros-Taurus*, edited by D. I. Olszewski and H. L. Dibble, Monograph 83 of the University Museum, University of Pennsylvania, pp. 207-236.
- Roustaei, K., H. Vahdati Nasab, F. Biglari, S. Heydari, G. A. Clark and J. M. Lindly 2004 Recent Paleolithic Surveys in Luristan, *Current Anthropology* Vol. 45, No. 5, pp. 692-707.
- Solecki, R. L. 1981 *An Early Village Site at Zawi Chemi Shanidar*, Bibliotheca Mesopotamica Vol. 13, Undena Publications, Malib.
- Watkins, T., Betts, A., Dobney, K., Nesbitt, M., Gale, R. and T. Molleson 1991 *Qermez Dere, Tel Afar: Interim Report No. 2, 1989*, Project Paper No. 13, Department of Archaeology, University of Edinburgh.



写真1 ボラギ溪谷遺跡 地点 75



写真2 ボラギ溪谷遺跡 地点 130

表1 ザグロス山麓の「プロト・ネオリシック」石器群におけるボラギ溪谷遺跡の位置づけ
(幾何学形細石器と押圧細石刃の存在を考慮している: Ohnuma (1997: Fig. 5) を修正)

西方ザグロス		東方ザグロス	
マイクロ・ビュラン技法・・・・→		続旧石器時代	
ケルメツ・デーレ段階7		ザヴィ・チェミ・シャニダール	
ケルメツ・デーレ段階6			
・・・・・・・・・・幾何学形細石器・・・・・・・・・・			
ケルメツ・デーレ段階5		ボラギ溪谷遺跡	
ケルメツ・デーレ段階4	ネムリク9下層	←・・・・・・・・細石刃の押圧剥離	
ケルメツ・デーレ段階3	ネムリク9中層	ムレファート	カリム・シャヒル
ケルメツ・デーレ段階2	ネムリク9上層		
マグザリーヤ			
・・・・・・・・・・土器・・・・・・・・・・		土器新石器時代	